
虚像の追跡者-Pursuer-

楼蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚像の追跡者 -Pursuer-

【ZPDF】

Z0581X

【作者名】

楼蘭

【あらすじ】

工藤新一が江戸川コナンとなって九年の歳月が流れた。十五歳になつたコナンを内なる敵が追い詰める。

Pr ologue (前書き)

前作「真実へのCountdown」では、本当に有り難う御座いましたm(—)m

前作に続いて二作目の組織物の小説になりますが、前作とは違つて組織色は若干薄くなると思います。……多分？

この小説はのんびり更新する予定です。下手すれば一ヶ月一回の更新になるかも知れませんが、宜しくお願ひしますm(—)m

「HCPDに友人がいる、彼等に頼んで、奴等の組織の事を探つて貰う事にしよう。その内、例の薬が手に入りお前の体も元に戻るだろ？」

「だから、危険な探偵、こは、もう終わり」「やだね！」「…」

「これは俺の事件だ、俺が解く！…」

「父さん達は手を出すな！…」

「それに……俺は未だ、日本を離れる訳にはいかねえんだ…」

「新一」

「まあいい、暫く」一いつの好きにさせちやるか？

「あなた…」

「その代わり、危なくなったら、直ぐに外国へ連れて行へば

「それに……他にも日本を離れたくない理由がありそうだ」

米花ホテルの301号室で、交わされた

……父優作とのある約束

「」の時の俺は、未だ気付いていなかった

あの時の、約束の言葉には……

……無理があると云つ事実に

移り行く想い

工藤新一がトロピカルランドで幼児化して、早九年の歳月が経つていた

あまりにも長すぎた九年と言つ長い歳月は、表面上穏やかな時を刻むコナンの強靭な精神を、着実に蝕んでいた……

帝丹中学校の帰り道にある川沿いの通学路

学ランに身を包み、学生鞄と空手胴着を肩からぶら下げたコナンは、傍らを歩く哀に声を掛けた

「おめえさ、俺が部活終えんの、わざわざ待つてなくて良いんだぜ？」

「別に待つてなんかいないわよ。私は薬学書を呼んでいるだけで、偶々部活を終えた貴方と帰ってるだけよ」

「なら良いけどよ……」

組織に通用する強さを身に付ける為、帝丹中学校空手部に所属す

るコナンが空手部の練習に出ていた間、毎日と書いて良い程、哀は必ず空手道場の近くで薬学書を読んでいた

まあ哀が素直になれる訳もなく、幾分顔を染めて平静を装つてはいるが、哀が毎日コナンを待つては最早周知の事実、従つて二人は付き合つてはいる！……と、帝丹中学校では噂の的になつていた

「コナンはと書つて、哀が待つてはいる事に内心笑みを溢しており、そんな自分がいる事をちやんと解つていた

（素直じやねえ奴？）

何時もの様に、哀と二人で夕陽に照らされた道を歩いてはいるが、新出智明と口付けを交わす蘭の姿が、目に飛び込んで来た

「どうかし……」

突然、立ち止まるコナン

怪訝に思った哀がコナンに声を掛け様として、その光景に言葉を失つた

(蘭さんと新出先生……)

ここで蘭が新出を拒絶していたなら、コナンは全速力で駆け付けて蘭を助けていたに違いない

だが、目の前の蘭は抵抗する事なく新出を受け入れて、嬉しそうに微笑んでいた

そんな仲睦まじい一人を、無言で見つめるコナンの左手をそつと握り締めた哀は、一言だけ言葉を紡いで立ち竦したコナンを促す

「行きましょ」

哀に促されたコナンは、再び歩き出した

「ああ……（Thank You……灰原）」

蘭と新出が三年前から付き合っている事は、コナンも知っていた

「待たせたのは自分自身だから仕がない」

……それで蘭が幸せならいい……

と……自分に対してもう言ひ聞かせたコナンは、蘭の幸せの為に涙を呑んで三年前に一度別れを告げた

だが当の蘭は受け入れられず、身勝手だと解つてもコナンを手離せなかつた

しかしながら血の繋がりがない成熟した蘭との同居は、第一次性徴期を迎えたコナンにとつては、肉体的にも精神的にも好ましくない過酷なもので、コナンが頻繁に工藤邸へ泊まる事で良好な関係を保つて來た

奥手とは言え多感な時期を迎えた上に、蘭と新出が寄り添う姿を見掛ける度、傷付いて來たコナンを支えたのが他ならぬ哀だった

……もし哀がいなかつたら?

コナンは一人では立ち直れなかつただろう……

無言の儘で歩き続けた一人は、二丁目と五丁目の別れ道へ差し掛かると、哀が何時もの様にコナンへ声を掛ける

「今日……、隣に泊まつて行くんでしょう？」

こんな時のコナンが、居候先である毛利探偵事務所には、絶対に帰らない事を哀は良く解っていた

九年間と言つて空白に依つて生じた新一と蘭の亀裂と、姉弟の様に過ごしたが為に最愛の蘭を失つたコナン

中途半端な状態を強いられてゐるが故に、深く傷付いてゐるコナンを放つて置けば、広大な工藤邸で何も食べない儘一日を過ごして仕舞う

その為、哀は必ず声を掛けていた

自分を案じて優しく包み込んでくれる哀に悪いと思ひながらも、コナンは何時も誘われる儘に頷く

「……ああ、そうだな。今日は自宅に泊まつてくれか？」

「やひ、なら夕食を用意するから寄つて行きなさい」

「Thank You……灰原」

哀の包み込む様な優しさに甘えてコナンは、素の自分を曝け出せる数少ない場所である阿笠邸に立ち寄った

「ただいま、博士」

「邪魔するぜ、阿笠博士」

「おかえり哀君、新一」

鞄をソファーに置き、崩れ落ちる様に腰を下ろすコナンを案じた
阿笠博士は、自分用に入れた珈琲をコナンに差し出した

「何か疲れどる様じやの、新一」

「まあな……、Thank You」

香り立つ珈琲を受け取ると、コナンは心を落ち着かせる様に一口
飲み込んだ

何時もと違つて覇氣のないコナン、阿笠博士は直ぐに異変を感じ取つた

（何事があつた様じやの……）

心配でならない阿笠博士は、着替えて来たばかりの哀はしがつと声を掛けた

「哀君……」

阿笠博士が何を言いたいのか？

全部聞かなくとも解る哀は手短に経緯を話した

「川沿いの土手で、蘭さんと新出先生がキスしてたのよ」

「……やうじやつたのか……」

幼い頃から蘭に一途だった事を知っている阿笠博士は、コナンの胸中を思い表情を曇らせた

(新一……)

「蘭さんは忘れるには、もう少し掛かりそうね」

「やうじゅの……、新一は小さい時から蘭君にべた惚れじゃったからね～」

「せめて、中学に上がると同時に毛利探偵事務所を出でいれば、未だ割り切る事も出来たじゃろうが、蘭君が新一を頑なに手離さんから」

「ええ、蘭さんは江戸川コナンと工藤新一を重ねてるから、工藤君を手離したくないんでしょうね……」

「やうじゅの……」

少し離れた場所から、無言の儘見守る哀と阿笠博士の視線の先には、霸氣をなくして頃垂れるコナンの姿があった……

「」の日、当たり障りのない会話を交わした後、本来の自宅である工藤邸へ戻ったコナンは、月明かりの射し込む私室で膝を抱えていた

（蘭……、新出先生と結婚するんだろうな。もう九年……、しゃあねえか）

携帯を手に取り時刻を確認すると、既に深夜〇時を差そつとしていた

（「」の時間は未だ起きていたな……）

意を決したコナンは、けりを着けるべくアドレスを呼び出して、蘭の携帯へ新一として電話を掛けた

数回の呼び出しの後、繋がった筈の通話口から

「」の電話番号はお客様の希望によつて繋ぎ出来ません

「……（着信 拒否かよ……）」

あまりのショックに茫然となつたコナンは電話を切り、ベッドへ倒れ込むとシーツをきつく握り締めた

（蘭……）

四方や着信拒否をされるとほ、夢にも思わなかつたコナン

深く傷付いた心を持て余して、拳を握り枕に顔を埋めて嗚咽を漏らした……

工藤新一と江戸川コナンの初恋が夢く散つたこの夜から一週間、コナンは受けた傷を癒すかの様に自宅である工藤邸に閉じ籠つた

この間、哀は食事の用意をする傍ら、頻繁に部屋を訪れてコナンを支えていた

「工藤君、朝食を持って來たわ」

哀が声を掛けて暫くすると、真っ赤な皿をしたコナンが扉を開けた

（泣いていたのね……）

「何時もわりいな…… 灰原」

「それは良いけど、貴方 無理にでも食べた方が良いわ」

「食欲はねえけどな……、風呂に入つてから食べるよ」

「じゃあ、下に用意して置くから

「わあつた」

お風呂から揚がり食事を取つたコナンは、壊れたオルゴールの様に蘭に着信拒否をされた事実を吐露した

「蘭に…… 着信拒否されてた……」

「……え？」

(蘭さんが、着信拒否？ そんな……あんまりだわ)

まさか蘭が着信拒否をしていた衝撃的な事実に、哀は茫然となつて目を大きく見開いた

「ははは……、ここ迄嫌われてたなんてよ」

深く傷付き懸命に涙を堪えて頑張れる、あまりにも弱々しいコナンの姿に、哀はただ胸を締め付けられた

「工藤君……」

「の二年間、事ある毎に傷付いて来たコナン

哀は堪らず傍らの席に座つて、傷付いたコナンを優しく抱き締めた

「……灰原……」

「コナンは少し驚きはしたものの、心地よい哀の温もりに涙を溢れ
る

「辛い時は泣くなさい、私が全て受け止めてあげるから我慢しないで」

「（……灰原） 格好悪いだろ……」

懸命に平静を装つコナン

「あらわづっ、私はそつま思わないわ」

全部吐き出して楽になりなさいと、言外に叫びたる哀の優しさと、コナンは一筋の涙を流す

「Thank You……」

「……あくじゅう」

哀に寄り掛かつて涙を流すコナンと、優しく抱き締める哀の姿を

阿笠博士は静かに見守った

（新一……哀君……）

哀に寄り添われた一週間、少しづつ落ち着きを取り戻し始めた矢先に、これ迄コナンを避けていた蘭が様子を見に来て仕舞つた

哀と阿笠博士の制止を振り切り、部屋に籠つてゐるコナンの元へ向かう蘭を追う哀と阿笠博士

「ちょっと待つてくれんか、蘭君？」

「新出先生と深い付き合いをする様になつて、工藤君を避けていたからてつきり来ないだろうと油断していたわ」

「ああ？」

自分が元凶とは思つてもいゝ蘭は、コナンに声を掛け続けた

「コナン君、大丈夫？　コナン君」

部屋の扉を叩きノブを回して、中にいるコナンへ無理矢理にでも会おうとする蘭

阿笠博士と哀がこの暴挙を許す筈もなく、蘭をコナンの部屋から

遠ざけるべく言い放った

「蘭君、済まんが帰つてくれんかの」

「え、阿笠博士……？」

理解出来ず首を傾げる蘭に対し、二人はきつぱりと言い放った

「コナン君は、蘭君と新出先生の関係にショックを受けて酷く傷付いてあるんぢやよ」

「ひづ言つひや悪いけど、蘭さんがいたら江戸川君は永久に出て来ないわ。三年前、別れを告げた彼を無理矢理引き留めた癖に、今では避けて傷付けてるぢやない？」

「少なくともコナン君が落ち着く迄は、そつとして置いてくれんかの」

コナンを思つ阿笠博士の言葉と、蘭を責める哀の言葉を受けて、蘭は自分がコナンの心を傷付けていた事を思い知った

(私が……コナン君を傷付けた?)

茫然と立ち竦む蘭

哀と阿笠博士は尚も言こと放つ

「今、江戸川君は漸く落ち着いて来てるの。これ以上彼を振り回して傷付けないで頂戴」

「済まんが、帰つてくれんかの……」

「解りました……」

阿笠博士と哀に事実を突き付けられた蘭は一礼すると、後ろ髪引かれる思いでその場を後にした

(「めんね……」コナン君)

蘭の後ろ姿を見送った哀は、ぽつりと呟いた

「「めんなさー……お姉ちゃん」

阿笠博士が蘭を見送りに玄関へ降りると、コナンは漸く姿を見せた

「何時もわりいな、灰原」

閉じ籠つてゐる自分の代わりに、哀と阿笠博士に蘭の対応をさせて仕舞つたコナンは、部屋から出るなり済まなさうに謝つた

だが、余程思つ所があつたのか、哀は腰に手を当てて小さな溜め息を吐いた

「良いのよ、蘭さんこまー言言つたかつたから一度良かつたわ?」

「蘭に?」

蘭に対しても哀が何を思つてゐるのか、皆田見当が着かないコナンは首を傾げて哀に問い合わせる

数秒の沈黙の後哀は、その想いを語つた

「私達が中学に進学した二年前、蘭さんは新出先生と付き合い出しているながら、工藤新一に酷似した貴方を頑なに手離さなかつたわ。

それなりに、今では工藤新一を着信拒否した上に、瓜二つの貴方を避けているじゃない

「三年前の貴方は工藤新一として江戸川コナンとしても、蘭さんの為に別れを告げた。 それなのに工藤新一に似てるからって避けるだなんて、自分勝手にも程があるわ」

「……灰原、ありがとな……ほんと」

「別に私は？」

頬を染めて横を向く哀

「ナンは満面の笑みを湛えていた

「哀愁の言ひ通りじゃない」

「阿笠博士」

蘭の見送りを終えた阿笠博士は、一言だけ残念そうに呟いた

「三年前、蘭君が受け入れてくれればの〜」

「ああ〜、無理矢理にでも出れば良かったんだらうづけどな?..」

「あの時は仕方ないわよ?..」

「そうだな?..」

「で、どうするんじや?..」

三年経つた今、再び決断の機会を得たコナンは毛利探偵事務所を出る決意を固めた

「近日中に毛利探偵事務所を出る」

父娘

阿笠博士に見送られて工藤邸を出た蘭は、ふらつく足取りで自宅である毛利探偵事務所へと続く道をじまじまと歩いていた

何時もの笑顔は消え失せ、焦点の合わない目をした覚束ない足取りの蘭と擦れ違う人々は、一様に怪訝な眼差しを向けた

「ねえ、あれって毛利探偵の所のお嬢さんよね？」

「ええ、そうよ。一体どうしたのかしら？」

周囲の声も聞こえず、ただ歩き続ける蘭の脳裏には、先程、哀と阿笠博士に言われた言葉が響いていた

「コナン君は、蘭君と新出先生の関係にショックを受けて酷く傷付いておるんじやよく

「この言つちや悪いけど、蘭さんがいたら江戸川君は永久に出て来ないわ。三年前、別れを告げた彼を無理矢理引き留めた癖に、今では避けて傷付けてるじゃない？」

>今、江戸川君は漸く落ち着いて來てるの。これ以上彼を振り回して傷付けないで頂戴<

>済まんが、帰ってくれんかのく

殆ど無意識の内に自宅があるビルへと戻った蘭は、呼び止める小五郎の声も耳には届かない様子で、三階への階段を上つて行った

「帰ったのか、蘭。コナンの様子はどうだったんだ？ おい、蘭
！――」

完全に外界を遮断した蘭の姿、流石の小五郎も何事か起こつた事を察した

「……何かあつたな」

恋愛は当事者の問題故に傍観を決め込んでいた小五郎だったが、頃垂れる娘の姿を見るに見兼ねて、蘭の部屋の扉を数回ノックした

「おい蘭、コナンと何かあつたのか？ 何なら相談に乗つてやるが
？」

？」

愛娘を心配する小五郎の声に、蘭は数秒の沈黙の後、部屋の扉を開けた

「……一体何があった？」

涙に濡れた娘の頭を、幼い頃の様に優しく撫でる小五郎の表情は、父親以外の何者でもなかつた

「お父さん……、『ナン君に』……新一に酷い事しちやつた

「せうか……（やつと気付いたか？）」

父親の胸で啜り泣く蘭

小五郎は父親として人生の先輩として、幼い恋を未だに引き摺る蘭に言葉を紡いだ

「いいか蘭……、恋愛つてのはな、待つてるだけじゃ逃げちゃあ~
駄目なんだよ。ぶつかり合つのも時には必要な事だ」

「え？」

怪訝な顔で父親を見上げる蘭

小五郎は男の立場から言葉を紡ぐ

「例え会えなくともな、あらゆる媒体を使って相手を支えなきゃなんねえ。探偵坊主が姿を消してもう九年だ、とんでもねえ事件に巻き込まれている事は間違いねえんだよ」

「とんでもない事件つて?」

「これは俺の想像でしかねえが、探偵坊主は、トロピカルランドで何だかの事件に巻き込まれたんだ」

小五郎の言葉で、何かが蘭の脳裏を掠めた

（何……今の……、何かを思い出し掛けた様な気がしたけど……）

「探偵坊主はその事件が元で姿を消した……と見て先ず間違いないだろう。そうなれば、周囲の人間に危害が及ぶのは必定、要するに蘭……おめえが一番危険なんだ」

「……」

父親が発した言葉に驚愕する蘭

小五郎は尚も言葉を続けた

「死んだ事になつてゐる探偵坊主は、蘭おめえを守る為に姿を消し影から守つて來た筈だ。もしも仮に、江戸川コナンと工藤新一が同一人物だとしたら……工藤新一を待たない、だが江戸川コナンとして側にいて欲しい、でも見るのは辛いから避けるつてのはあんまりじゃねえか？」

「俺が探偵坊主の立場だつたら、間違いなく同じ事をするだらうよ……蘭、おめえと英理を守る為に、俺は自分を殺す」

「そりやあ～父親としては、散々おめえを泣かせて來た探偵坊主が腹立たしいがな？」

「一人の男としては理解出来る」

「……お父さん」

父親の推理を聞いて立ち竦む蘭

九年の歳月を得て、蘭は記憶の底に埋もれていた出来事を思い出すとしていた

「私……私……」

「良へく考え方よ、蘭」

優しく諭す小五郎に小さく頷くと、蘭は父親の言葉を重く受け止めて一人、部屋で考え込んだ

（もし……もしも、お父さんの言つた事が本当だつたとしたら？）

（私は新一に対してもない事をしたつて事？）

（「あなたさー、新一）

（「あんね……」）

（私はちやんと向き合わなきやならなかつたんだよね……）

（例えどんなに傷付いたとしても、ぶつかり合つてもう待てないつて伝えなきゃいけなかつたんだ）

（「あんね……、でもなんだろ？）

（何か引っ掛かってる……何かを忘れてる様な……新一がいなくなつたあの日、何かを見ている気がする……重要な手懸かりを……新一）

在つて然るべき物（前書き）

早速お気に入りの登録&評価して頂いて本当に有り難う御座います
m(—)m

漸く自分の気持ちに気付いたコナンです……コナン鈍すぎ？

在つて然るべき物

「コナンが部屋へ閉じ籠つてから十日後、一つの節目を迎えていた

何時の如く、突然口サンゼルスから帰国して来た優作と有希子、工藤邸に設けられている家族用のリビングで向き合つていた

「これが、お前の戸籍だ」

「慧一・コナン・工藤・アメリカ国籍だ、高等部進学はこれで大丈夫だろ?」

「Thank You……父さん」

コナンが嬉しそうに受け取つた物……それは、アメリカ合衆国の出生証明書とパスポート及び外国人登録証明書

義務教育期間の終了に伴つて、無戸籍状態であるコナンの就学が出来なくなつた事で、優作は哀とコナンの戸籍を作成していた

「新一……、LAに来ないか?」

「ね？ センショ？ 新ちゃん？」

阿笠博士から、事の経緯を聞いていた優作と有希子は、この二年間帰国する度に渡米を促していた

「俺と有希子は未だ日本国籍だが、永住権を既に取得しているし、老後は L.A. で過ごすつもりでいる。そりゃあお前の渡米も時間の問題ではあるな」

「……良こそ機会だとは思ひナビよ」

（蘭とは終わったし、 L.J. の所奴等とは平行線の儘で進展がない……）
（旦、 L.A. に渡米して、静養するのも良くはあるナビよ……）

俯き思案に暮れるコナンは何故か、未だに迷っていた

「これ以上新ちゃんが傷付くのは嫌よ？ L.A. にこいつらしちゃい？」

「まあ落ち着け、有希子」

「だつて優作？」

何とかコナンを連れて帰ら^ひと懸命に説得する有希子

優作もまた内心は有希子同様、コナンを案じつつも逸る気持ちを
抑えて、選択権をコナンに委ねた

「卒業迄は少し時間があるんだ、そつ急ぐ事はないさ」

「でも~」

愛妻の肩を抱いて宥めながら、優作はコナンに決断を促す

「良く考えて決断しなさい」

「わあつた……、Thank You父さん母さん」

決断を迫られ目を伏せるコナンの脳裏には、この三年間、常に傍らでコナンを支えて来た哀の姿があった

（蘭とはもう終わってはいるが、灰原もいるし……、って何でありますか？）

「新ちゃん、どうしたの？」

突然、顔を真っ赤にして慌てるコナンを見て察しが付いた優作は、然り気無く背中を押した

「ほ～成る程な、どうやら氣になる娘がいる様だな」

「そんなんじゃねえよ？」

「その顔じゃ白状したも同然よ、新ちゃん」

「差し詰めお相手は哀君かな」

「あら～やつぱり哀ちゃんなの」

完全にからかいモードへと突入した一人に、一頻りからかわれて漸く自覚したコナン

蘭へ別れを告げたあの日から、二年の歳月が流れ様としていた

「やれやれ？」

（何時の間にか……あこつに捕まつてしまつたな）

哀を想つこの時のコナンの表情は、嘗てない位の優しい微笑みを浮かべてこる事に、コナンは気付いていなかつた

「やれやれ？」

「そんな顔されたんじゃ、からかいつらも起きないわ？」

「は？」

自分がどんな表情をしてこるか、全く直観がないうまの顔面はもつ真つ赤だ

「早く出でて一緒に連れて来い？」

「わざわざ出でなこと、鳶に油揚げ漬われるわよ

「んな真似させつかよ？」

またか両親に自覚をせられるとは思つてもいなかつたコナン……

独占欲だけは人一倍強かつた

（他の男に渡して堪るか？）

（相変わらず独占欲強いんだから？）

満面の笑みを浮かべたと思えば嫉妬で怒りを露にする、表情豊かな我が子の姿に、優作と有希子は笑みを浮かべた

（世話の焼ける奴だ？）

（もう大丈夫ね）

「なあ父さん、家はどうすんだ？」

突如 正気に戻つたコナンは、脱線していく渡米に伴う問題へと無理矢理に話を戻した

「やつだな、築年数一十五年を経過して老朽化も進んで来てこる、何れは取り壊す事になるだろ?」

「そつか……」

「新ちゃんが育った家だから寂しいけどね~」

「形ある物は何れは形を失う物だ、仕方ないさ」

「しゃあねえよな~」

思い出の詰まった工藤邸

一抹の寂しさを感じてコナン達は暫しの間想いを馳せた

「まあ、この家の処遇はお前次第だ」

「新ちゃんはどうしたいの?」

有希子が心配そうに声を掛けると、コナンは表情を曇らせてもう一つの問題を告げた

「正直な所、今は推理したくねえんだ。嘗ての工藤新一を求められて嫌気が差してゐる……」

「高校生探偵工藤新一は最早存在しない、にも拘わらず田暮警部は江戸川コナンではなく過去の亡靈工藤新一の幻影を求めるんだ」

「……田暮警部が待つてるのは今の俺江戸川コナンじゃねえんだ」

「九年前に死んだ工藤新一の亡靈を待つてゐる」

幾分、疲れた表情で現状を憂つコナンを見た優作は、日本警察の現状を察して深い溜め息を吐いた

「そうか？」

「優作……、やっぱり静養させた方が良いんじゃない？」

心身共に疲れきつていると判断した有希子は、優作に判断を求めて振り返った

「ああ……そうだな」

「一度日本を離れて静養した方が良いかもしない。九年間組織と渡り合った事もあって疲れてるんだろう」

「田暮警部には私が話して置く。元々、未成年に捜査協力させる事態が間違っているのだからな」

「そうね、新ちゃんは未だ高校生だったのに、授業中に呼び出して迄捜査協力させるのはどうかと思うわ」

「学業に支障がない範囲なら未だましも、出席日数が危うくなる程呼び出して貰つては困る」

「父さん……母さん」

「つきり……甘えるな……と諭されるとばかり思っていたコナンは、配慮を欠いた田暮に対して眉を顰める優作に驚いていた

「お前も呼び出しえなければ、現場には行かなかつたんだろう?」

「せりやあ、授業中だったしな」

「今はどひつなの？」

「保護者であるおひりやさんの手前、頻繁ではねえナゾ……」

「ナンが言葉を濁すと、優作は言葉にならなかつた先を察した
「成る程な……、毛利さんが留守で手を借りれない時に呼び出す
のか？」

「ああ……」

「解つた、日本警察は私が話を付ける。お前は暫く静養しろ、良一
な？」

「わあつた……Thank you

九年もの長い間、極度の緊張状態を強いられたナンの精神は、
限界に達していた

如何に優れた探偵と言えども、コナンはプロではなく、一般人に過ぎない

一向に進展しない組織との攻防に加えて、都内で勃発する難事件、更には中途半端な関係を強いられた蘭の存在

これらの諸問題が不運にも重なりコナンの精神を疲労させ、最早爆発寸前迄来ていた……

「ところで哀君は？」

「学校行つてるけど、灰原がどうかしたのか？」

不意に哀の話題に変えた優作にコナンが怪訝な声を上げると、優作は哀のパスポートを取り出した

「彼女の戸籍も作つて置いたんだ、阿笠博士の養女になると決まつていただろう？」

「良い機会だから、阿笠玲美の戸籍を作つたつて訳」

「そっか、あいつも喜ぶだらうな

「哀ちゃん、喜んでたんでしょう？」

「ああ、阿笠博士は親代わりだからな。喜んでたぜ、帰つたら来るんじゃねえの？」

久し振りに親子の会話が弾んでいると、穏やかな空気を切り裂く様に着信音が鳴り響いた

「・・・」

「.....はい、コナンです」

浮かないコナンの表情で相手が解つた優作は、鋭い眼差しを向けた

電話を切り深い溜め息を吐くと、コナンはゆっくりと腰を上げた
「.....はい、解りました」

電話を切り深い溜め息を吐くと、コナンはゆっくりと腰を上げた

危惧

「行くのか？」

浮かない表情の儘、田暮から呼び出しへ応じた様であるコナンは、優作は一言だけ言葉を紡いだ

「ああ……」

「無理しないでお断りしたひつ。」

優作も有希子も精神的疲労が著しいコナンが心配で引き止めるが、行かない訳には行かなかつた

「せうしてえけれどな、あいつ等が田撃しちまつてゐてえだから……」

「あら、哀ちゃん達が発見者なの？」

「ああ、下校途中に遺体を見付けたらしいんだ」

「それなら仕方がないな?」

「コナンの言葉を受けて立ち上がった優作は、支度を整えるべくリビングを後にする

「あら……、優作も行くの?」

「今的新一は崖っぷちだからな」

「なら私も行くわ?」

そう笑顔で告げながらリビングを後にする両親の気遣いにコナンは思わず笑みを溢した

(Thank You……)

支度を整えて事件現場に向かい車から一足先に降りたコナンは、真っ先に哀・元太・歩美・光彦の姿を見付けた

「おい、おめえら」

「あ、コナン君……」

「コナン……」

「出歩いて大丈夫なんですか？」

「おめえ顔色わりいぞ？」

十日間も学校を休んだコナンの姿を見るなり、一斉に駆け寄ると歩美が真っ先にコナンの体を気遣つ

「コナン君、無理しちゃ駄目だよ？」

「Thank you、でも大分良いんだ

と、コナンは務めて明るく振る舞つものの、顔色は決して良いとは言えなかつた

(少しほは顔色良くなつてゐるけど、体は怠そつ……)

(無理してますね、コナン君)

(大丈夫じゃねえだろ?)

何処か翳りのあるコナンの笑顔元太達は本調子でない事を直ぐに悟った

「突然呼び出して」「めんなさい、江戸川君」

十日間、コナンに付き添つた哀は傍らに佇むと本調子でないにも拘わらず、呼び出して仕舞つた事を我が事の様に謝罪して來た

「別に良いって、おめえのお陰で随分楽になつてんだぜ?」

「なら良いけど、顔色が悪すぎるわ」

何時もの笑顔で話す二人の対面では、元太達が呼び出した日暮に怒っていた

「随分と止めたんだけどよ?」

「警部さんつてば聞いてくれないの!...」

「来れる様ならって言つてましたが、コナン君が断れない事を知つて呼んでますからね」

仲間想いの元太・光彦・歩美

コナンを殊の外案じる元太達は、日暮を睨み付けて怒りを露にしていた

「歩美、絶対に許さないんだから……」

「全くです？」

「そりだよな……」

「「は」・「ん」……」

「ありがとな……」

三人の温かい想いに、コナンは哀と顔を見合わせて笑みを溢し、
強力な助つ人を指差した

「けど大丈夫、今日は田暮警部が頭が上がらない助つ人がいつから
よ

「 「 「え? 嘘?」 「」

見事にハモつた三人の視線の先には、悠然と近付いて来る優作と
有希子の姿があった

「ちょっと、貴方ね?」

「しゃあねえだろ、俺が本調子じやねえんだ」

「そひ、流石に思つ所があつたのね」

「……日本警察に抗議するつてよ」

「あら、面白そつね」

真剣なコナンに対して幾分面白がつてゐる哀、コナンはそれとは
言わずに小さな溜め息を吐いた

「バーロ、お陰で厄介な問題が浮上してんだよ。」

「厄介な事つて?」

意味深な「ナンの言葉に表情を隠しきする哀の隣では元太達が驚いていた

「やあ」

「嘘、大きくなつたわね~」

「「「」」んにこな~」」

「「」」無沙汰してます?」

「わざわざ済みません……」

「いや……構わないよ、呼び出したのは田畠警部だからね」

何時もの悠然とした笑みを湛える優作だが、流石に今回は田暮に
対して静かなる怒りを覚えていた

「ナンの到着に気付き田暮が掛けた言葉は、ハコナンハではなく
ハト藤くだった

「お～ト藤君、待つとつたぞ」

「・・・遅くなつて済みません」

複雑な心境で無理矢理笑顔を作るコナン、優作と元太達は其々に
声を上げた

「」の子は新一ではありますよ、田暮警部

「優作君じゃないかーー！」

「」無沙汰します」

「もう警部さんつたが、コナン君は新一のお兄さんじゃないでばー。
ー。」

「つたく何回間違えるんだよーーー」

「間違えると言つよりは、『ナン君に新一さんを重ねてると言つた所ですね』

「そうだね」

「はつきり言つて人権無視ね」

「全くですーーー」

「そりだそりだーーー」

元太達に口々に責められた田暮は、上辺だけの謝罪を繰り返すに留まつた

「いやー、済まん済まん」

優作や元太達の抗議も、大して氣にも留めない田暮は優作とコナンを現場へと案内した

「つたぐ、全然解つてねえぞ！！」

「ええ

「まあ、優作さんには任せましょ？」

「哀ちゃん？」

仲間想いの腹立たしげな元太達の声を聞いた高木警部補は、心底済まなそうに声を掛けて来た

「「」めんよ……皆、僕や美和子さんも言つてゐるだけだね」

「高木刑事」

「全く効果ねえよな……」

「やうなんだよ……、この儘ではコナン君を失つ事態になり兼ねない。それだけは何としても避けたいんだ……」

「工藤新一君に続きコナン君迄も失う事は、日本警察の大損失なんだよ」

沈痛な面持ちで言葉を紡ぐ高木と元太達は、年齢差を越えて真剣に話し合っていた

「でもコナン君はもう限界だよ？」

「江戸川君の精神は崖っぷちに来てるわ。何が起こるか解らない状況だから、今の彼に推理をさせたくなかつたのよ」

腕を組んで言い放つた哀の言葉を真剣な表情で聞いた高木は、背後を振り向き最後の切り札である優作を見つめた

「もつ、日暮警部の親友でもある工藤優作氏に任せるとしかない」

「……優作さん、日本警察に抗議するやつよ」

「え、ほんとかい？」

「ええ、彼が言つてたから間違いないと思うわ。それだけ江戸川君の精神状態は深刻なのよ」

「もしコナン君の精神が破綻し、上層部が動けば田暮警部はただでは済まなくなる……」

「田暮警部が氣付くしかないわね、警部さんは今工藤新一の亡靈を見てるんだもの……」

複雑な表情を浮かべた高木は、新米刑事当時からの上司を案じて田暮の背中を見つめていた

「じゃあ、何か思い出した事があつたら教えてくれよ

「うふ、高木刑事に教えるね

「間違つても田暮警部には教えねえぞ」

「元太君、それはちょっと?」

幼少時からの協力者である、元太達の根深い怒りと不信感を買つて仕舞つた田暮

高木はまだ静観せざるを得なかつた

(田暮警部……)

逆鱗（前書き）

お気に入り登録＆沢山のアクセス本当に有り難う御座ります（一
一）

タイトルの逆鱗は怒らせると一番怖いであつての人を怒らせちゃ
いました……

まあ～誰にでも逆鱗ですが？

当の田暮は高木の危惧等氣付く事なく、哀達が発見して仕舞つた遺体を優作とコナンに見せていた

「被害者は四十代後半と思われる身元不明の外国人の男性と三十代後半と思われる外国人の女性で、見ての通り全身が黒尽くめの出で立ちでな」

殺害されていたのは……

何と、組織の狙撃手であるキャントンティとコルンだった

（今度はキャントンティとコルン……）

自然と険しい表情になるコナン

傍らの優作は悠然とした笑みを浮かべ、然り氣無く田暮を誘導し

始めた

「田暮警部、身元が判らなければ我々にはどうする事も出来ませんよ?」

「やはりやうか……」

がつくりと肩を落とす田畠は、優作とコナンに期待していただけに頃垂れていた

「優作君と上藤君なら、最近次々と発見されている黒死くめの遺体の件で、何か知ってるかと思っていたんだが……」

「私はただの推理小説家ですし、コナン君は中学生に過ぎません。残念ですがお役には立てませんよ」

「深く詮索されでは困る」コナンは、優作の言葉に口出しそうな事なく二人の遺体を眺めていた

(死因は頭部の一発……即死か)

(この十日間の間、かなりの数のメンバーが見付かっている……、一体奴等に何が起こってるんだ?)

コナンが思考を掘り下げて推理していると、田畠の一言がコナンの精神を撃ち碎いた

「わざわざ来て貰つたのに済まなかつたな、上藤君」

「……（また……か）いえ、構いませんよ」

小刻みに震える「一ナンを見て、優作は早々に帰宅する事にした

「一ナン君ですよ、田暮警部」

普段より数段低い優作の声

優作が醸し出す殺氣の片鱗を、流石に感じ取つた田暮は畏縮して謝罪する他なかつた

「あ……ああ、済まない？」

「顔色が悪いな……」

「一ナンちゃん、帰りましょ？」

「コナンちゃんに何かあつたら、亡くなつたご両親に顔向け出来ないわ？」

コナンを守る様に両脇から支えて目暮と引き離す優作と有希子

田畠に有無を言わせずに、コナンと共に停めてある車へと向かった

「哀ちゃんも来てくれるかしぃ?」

「解りました、じゃあね」

「うん、また明日ね」

「アーティスト」

「灰原さん、さよなら」

早々に車に乗り込み現場を離れたコナンは、車が発進した途端に後部座席に倒れ込んで意識を失った

「工藤君！！！」

「新ちゃん?」

ついに限界を越えて倒れたコナン

真っ青な顔色で畳倒し呼び掛けに応じる事が出来ないコナンを、
哀は素早く容態を診始めた

(熱が高過ぎるし、脈拍も早過ぎる)

「もう限界だわ、病院へ向かって下さい」

「解った」

哀の言葉を受けて素早くハンドルを切った優作は、設備が整った
米花総合病院へと車を走らせた

意識を喪失した儘米花総合病院へ運ばれたコナンは、精密検査が
行われた後緊急処置が施された。度重なる精神的疲労から、高熱を
出し点滴を受けて深い眠りに就いているコナン

「ナンの容態は予想より深刻な事態になつていた、組織の問題に始まり工藤新一に固執する日暮や中途半端な状態を強いられた蘭との関係等……」

様々な問題に見舞われたコナンの精神は、九年間で積もり積もつた疲労からついに限界を越えた

検査が終わり個室で眠り続けるコナンを見下ろしていた優作は、拳を握り締め殺氣を迸らせながら踵を返した

「有希子、新一を頼んだぞ」

「ええ……（優作……）」

無言の儘で扉を見つめる有希子は、不安氣な眼差しを向けていた

「有希子さん……」

息子の想い人である哀にすがる様な眼差しを向けられた有希子は、哀の気持ちをくみ取り力なく横に首を振る

「ああなつて仕舞つた以上……、最早誰も優作を止められないわ。」

決して怒らせてはならない人を田暮警部は怒らせて仕舞つたんですもの」

「優作がその気になつたら最後、世界中を敵に回すと言つても過言ではないわ、世界的推理小説家工藤優作はそれだけの影響力を持つてゐるのだから……」

「そうですね……」

扉から視線を戻した有希子は、高熱で苦しむコナンを見つめてつぽつりと呟いた

「恐らく新ちゃんも気付いてるわね……」

「まさか……、そんな筈は……」

緩やかに首を振つた有希子は、沈痛な面持ちで言葉を絞り出す

「つづん、これ迄にもチャンスは幾度となくあつたわ、新ちゃんは薄々気付いていた……だからこそ九年も掛かつて仕舞つたのよ」

「じゃあ……工藤君は……」

驚きと困惑が混じつた複雑な表情を湛える哀

有希子は小さく頷いて呟いた

「ええ、新ちゃんは感付いてる。あの方の正体と組織の真実、そしてあの方に守られてること言ひ事」

コナンの個室を後にした優作は、抑えていた殺氣を迸らせていた

（よべも新一を）

（新一が懇意にしていたから……）

（新一が想いを寄せていたから、多田に見て来た）

（漸く）（遙、漕ぎ着けて来て、後少しで解放してやれると）

（）

（相応の報には受けとめ）

(田暮十三……毛利蘭……)

激怒した優作は、車に乗り込むなり携帯を手に取った

「もしもし、ご無沙汰しています。工藤優作ですが、これから少々お時間を頂けませんか？」

「はい……では後程、失礼します」

携帯を閉じた優作は、もう一台ポケットから漆黒の携帯を取り出し、ある人物へと電話を掛けた

「私だ、警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査二係の田暮十三と毛利蘭に脅しを掛けろ……殺す必要はない」

抗議（前書き）

お気に入り登録がもう一桁に？

登録して下された皆様本当

に有り難う御座います m(_ _)

m?

今話の抗議編は台詞が多くなっています。ラストの方の会話は少々立場が変化します

「ナンが意識を喪失している間……

優作は日本警察の象徴とも言つべき、警視庁最上階の一室にいた

「突然伺いまして申し訳ありません。お忙しい中、時間を割いて頂きました、有り難う御座います」

「いえ、それは構いませんが……」

恐ろしく慇懃な礼儀正しさと、優作が醸し出す触れる者を切り裂く様なオーラ

来客用のソファーに腰を下ろす警視庁のトップ白馬警視総監は、対面の優作が迸らせる殺気に全身の筋肉が畏縮して行くのを感じた

（凄い殺氣だ……、一体何が？）

流石に一警部の動向等知る由もない白馬警視総監は辛うじて本題を促した

「わざわざお越し頂いた用件を伺いしましょ」

額に「ひつすら」と冷や汗を滲ませ完全に気圧される白馬警視総監に、優作は悠然足る態度で言い放つた

「今日は私の息子の事でお伺いさせて頂きました」

「『新一』息と『ひつ』、工藤新一君ですか？」

怪訝な表情で問い合わせる白馬に対し優作は重々しく頷くと、もう一人の義息子コナンの名を告げた

「新一も関係していますが、今回お伺いしたのはコナン君の事です」

「江戸川コナン君ですか？ 確か、先日江戸川夫妻が事故で亡くなられた為、養子縁組を為されると聞き及んでおりますが……」

「ええ、息子に瓜二つのコナン君とは以前から妻と交流がありましてね……。それが縁で、事故で江戸川夫妻が亡くなられたのを機に養子縁組をしたんですが……、些か問題が起きているんですよ」

「問題？」

事の次第を知らない白馬は先が読めず、怪訝な表情を浮かべながら優作の意図を計り兼ねていた

（一体何があつたと言つんだ？）

「こちらの警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係に所属する田暮十三警部に、コナン君が度々呼び出されています」

ピクリと白馬の表情が強張り、眉が跳ね上がった

事件解決の為に長年の捜査協力を黙認して来た事を知つてゐる優作は、他力本願で解決しようとする日本警察に對して怒りを覚えていた

双方共に互いを警戒する中で、優作は警視庁の長たる白馬警視総監に容赦なく斬り掛かる

「今のコナン君は様々な諸問題が重なり、精神的に不安定な状況が続いています。推理をしたくないと言つ程、追い詰められて仕舞つてゐる状況なんです」

「それにも拘わらず田暮警部は、不安定なコナン君を呼び出して、会つ度に工藤君と呼んでいます」

「……要するに江戸川コナン君を工藤新一君と呼んでいると言ひ事ですか？」

「そうです、幾ら注意を促しても変わりません。先程も発見者である元太君光彦君歩美君哀君達の制止を振り切つて呼び出した上、工藤君と呼んでいました。例え仮にコナン君と新一が同一人物だとしても、コナン君を新一として呼ぶ事は、様々な事を経験し試練を乗り越えて成長して来た、江戸川コナンと言ひ存在を否定する事になるんですよ」

「……今、コナン君は？」

懸命に平静さを装つてはいるが、膝の上の拳は震え端正な表情は引き攣り、白馬の額からは冷や汗が流れ落ちていた

「ここの十日間は体調が優れずに、学校を休んで臥せつていましてね、先程自宅へ戻る車内で昏倒して米花総合病院に入院しました」

「……（最悪だ……）」

完全にポーカーフェイスは崩れ落ち、頭を抱える白馬警視総監に対し優作の言葉は止まる所知らない、それ程に迄、優作の怒りは深かった

「他ならぬ田暮警部だからこそ、息子共々協力をさせて貰つて来ました。それを良い事に授業中にも拘わらず、ましてや体調が優れないコナンを呼び出して捜査協力を工藤新一である事を強いるとは、了見違いも甚だしい！…」

「申し訳ありません…！」

ソファーから立ち上がるなり、深々と頭を下げる白馬警視総監に對し、優作は至つて悠然と構えており鋭い眼光を放つていた

「息子達は自分で要請に応じはしましたが、何分一人とも学生ですから、自制が効きません。ですから呼び出すのは放課後の数時間のみにして頂きたい」

「解りました、此度の部下の不手際誠に申し訳ありませんでした。田暮十三警部は元より、警視庁内隈無く徹底した指導改善を早急に実施致します」

警視総監の平身低頭たる姿に、漸く怒りを和らげた優作は深い溜

め息を吐いた

「宜しくお願ひします、まあ、コナン君が倒れたのはそれだけで
はないんですがね？」

「何があられたんですか？」「

優作が表情を和らげた事で、漸く一息吐いた白馬は詳しい事情を
聞く事となつた……

「元々息子達はある事件に巻き込まれています。その為に精神的疲
労を抱え込んでいましたが、それに加えて今迄お世話になつていて
毛利探偵のお嬢さんが、息子に瓜一つのコナン君を避けているんで
す。顔を見るのが辛い、でも手離したくない。ですが第二次性徴期
を迎えたコナン君は、蘭君を慕つが故に過酷な状況で追い詰められ
て仕舞つたんですよ」

「そうでしたか……、ただのお姉さんでしたら問題はなかつたんで
しょう。でもコナン君は本気で慕つていた……、それ故に追い詰めら
れ田暮警部が止めを刺して仕舞つた……と言つた所ですか」

「ええ、その通りです。今漸く解決に向かいつつあります。コナン
君を新一だと連呼されるのは命に関わる、何がなんでも止めて頂か
ねば困るんですよ」

「……知らなかつたとは言えども、一般人を命の危険に晒した事は紛れもない事実、日暮十三警部は厳しい処罰を与えます」

「私としても」」迄するつもりはありませんでした、しかしながら一度も息子の命を失う事だけは、断じて避けなければならぬんです。例えそれが許されない事としても……」

「……全ては罪もない国民の命を守る為です。貴殿方のその後に關しては我々が守り通します」

「有り難う御座います」

世界的推理小説家である工藤優作による、日本警察に対しての正式な抗議は警視庁中に知れ渡る事となり、本庁に戻つた日暮十三は警視総監室にて厳重注意を受けた後、上層部の処分の決定迄の間、自宅待機命令が言い渡された

迷路（前書き）

「**真実へのCountdown**」「**虚像の追跡者 -Pursuer-**」共々お気に入り登録&沢山のアクセスをして頂いて、本当に有り難う御座いますm(――)m

今話の「迷路」で組織の目的の一部が明らかになりますが……

真逆の設定です？

通常ならば、日本中に知れ渡り日本警察は糾弾の嵐と言つた所だが、抗議を行つた優作本人が内部処理を依頼した為、マスコミ各社及び世間に漏れる事はなく、極秘の内に処理された

今回の一連の騒ぎは当然この人の耳にも入つた訳で、即ち名探偵ならぬ名刑事の雄叫びが轟いた

「なんやで
！」

「阿呆、 静かにせんか！！」

大阪府警本部最上階

本部長室で雄叫びを上げたのは、ご存知服部平次警部この人

「それ、ほんまなんか！！」

父親の机に手を付いて詰め寄る平次に平蔵は淡々と答えた

「ああ、昨日「ナン」君が入院しつた後、工藤優作はんが本庁に抗議しつたんや」

「それで警部はん、処分決定の間自宅謹慎になつたんか？」

「やうや、えらい激怒してますかい相心の処分になるやう

「なんとかなうへんのか？」

「無理やな、坊主の命が掛かつとる停職一ヶ円と言つた所やろ

？」

「まあしゃあないな？」

「坊主の見舞いに行くさかい休暇取りたいんやけどえか？」

「……まあええやう？」

「序でに本庁と田暮警部の様子を見て來い」

「わあつた

平次の休暇届に判子を押しながら仕事を言い付ける平蔵に対し、平次は文句を言わずに受け取った

「ほな、仕事戻りますよつて」

敬礼し一刑事と上司の関係に戻り部屋を退出する平次に対し、余計な一言が飛んだのは言つ迄もない

「確り捜査せえへんと休暇没になるで」

「わあつとるわ?」

扉の隙間から顔だけ出して返事をする平次は年相応の若者の顔だつた

「へへへ……、末々ガキやな」

「……もつらしゃ

平蔵がぽつりと漏らした一言が平次の耳に届く事はなかつた……

翌日

「上藤……」

米花総合病院へ駆け付けた平次は弱々しく横たわるコナンに目を見張つた

(……無理しあつてからに)

「よへ、服部」

「つたぐ心配をせりつて?」

ベッドの縁に腰を下ろし溜め息を吐く平次の姿に、コナンは済まなさうに咳こいた

「わいいな……」

「まあ～、わざとやないんやし、かめへんつて?」

「熱は下がったんか? エリエ高かつたんやろ?」

「ああ、大分楽になつたぜ」

「ならええけど……、何があつたんや?」

横目でコナンを見下ろす平次は現役の警部だけあって鋭い眼差しを向けていた

(そんな田で尋問すんなつての?)

平次の眼差しにものともしないコナンはその胸の内を吐露する

「別に大したこたねえさ……ただ俺の推理通りだつたつてだけさ」

「まづか……」

「なあ～服部、正義つてなんだ?」

「……」藤

「俺……解んなくなつちまつた」

シーツを握り締めて、今では年上となつた親友にやりきれない思いを吐き出すコナン

嘗ては平次自身も悩み苦しんだ果てに通つた道を今コナンが通つている

少しばかり戸惑つている親友に対し平次は、嘗て自分が幼馴染みに言われた言葉を告げた

「そないに、難しゅう考えんでもええんかやつか？」

「え？」

平次の言葉に俯いていた顔を上げたコナンは怪訝な表情を見せた

「相手は國家や、あいつ等の悪事は国と法が守る。正攻法での立件

せどり足掻いても不可能と来れば、最早方法は一つしかあらへんや
い

「お前はお前の正義を貫けばええんや、例えその唯一の方法が犯罪
やとしてもな」

「……服部」

肯定されるとと思つてもいなかつたコナンは、驚いた眼差しで平
次を見つめた

「確かに方法は犯罪や、許される事やない。せやけどな、トト藤……
それは私利私欲やのうして、何の罪もなし命を守る為にした事やで
？」

「ゾロは犯罪者やなこ、俺はそり押つとる。まあこの場合、ゾロ
ことはあことばかり違つけどな……大本は変わらへんやが、トト
藤？」

犯罪あれど犯罪者ではない

やう思げる平次

「ナンは田から鱗が落ちた様に何時もの笑みを浮かべた

「……そうだな、俺は何を迷つてたんだ。ただ信じれば良いだけじゃねえかよ。俺の父さんと母さんそして灰原は犯罪者じゃねえってな

「ただ國家犯罪を暴く組織を受け継いだだけの事だ、まあ研究関係のおまけはある様だけよ?」

「それだけ、並々ならぬ証があるひひひう事やひな

「さうだな、でも一体何の目的でAPT-X 4869を開発してプログラマーを集めてんだ?」

「それはトップシークレットや、ガードが固つて解らへん

「おめえも知らねえか?」

「ああ

お手上げの仕草に小さく毒づきはあるものの、ナンは現地点で

判つている範囲で推理を掘り下げる

「ほんで、今どないなつとるんや?」

「……秒読みつて所だな」

「危険レベルのメンバーの遺体が相次いで見つかってんだ。本拠地の場所も判つてるし、後は時を待つだけだ」

「FBIは知つとんのか?」

「……恐らく、ジョイムズさんと赤井さんだけだな。後は知らねえと思う

「ほな……連携は無理か」

「ああ、危険過ぎる。特にジョーティ先生は感情的になるからな……
万が一の時は暴走しかねない」

「あの姉ちゃんは厄介やな~?」

ガシャガシャと頭を搔いて知恵を搾る平次に対して、冷静に推理する「ナン

「何か……方法があれば良いんだけどよ？」

「あの姉ちゃんも、まさかあの方以下幹部達がNOのことは思わへんやろな」

「そりゃそうだろ、組織の創立者自体がNOだつてんだからな？」

「驚くやろな～」

「てめえ面白がつてんだろ？」

大阪人の氣質なのが事ある毎に面白がる平次を半眼で睨み上げる
「ナン

多少熱はあるものの、普段通りの笑顔を漸く見せた「ナン」に優作
と有希子そして哀は、ほつと胸を撫で下ろしていた

（良かつた……新ちゃん）

(漸く迷宮を抜けた様だな)

(ええ……ありがとう新ちゃん)

(…………めんなさい、工藤君)

(そして……有り難う)

(果たして真実を知つたお前は耐えられるか?)

轟く闇（前書き）

お気に入り登録&評価

本当に有り難う御座います m(—_-)m

更新遅くなつて済みません.....

都内某所でジンが受けた指令は、殺す訳でもなく脅すだけでいいと言ひ奇妙なものだった

「脅すだけ……ですか？」

「そうだ、殺す必要はない」

「ターゲット本人でなくともいい、最も大切な人物を痛め付けてくれればいい」

些か奇妙な指令だと思ははしたが、あの方の命令は絶対である為おぐびにも出さず肯定の返事を返した

「解りました」

「頼んだよ……ジン」

「Yes , BOSS」

昨夜の命令を思い返しながら、ターゲットを睨むジンにウォッカが疑問を投げ掛ける

「齎せつて一體どつ脣つ事なんですかね、兄貴」

「さあな……、俺達はあの方の「命令」に従う迄だ」

「それはそうですが……」

そう言つてジンは、スコープを覗きながらターゲット新出智明へ
向けて引き金を引いた

「ドウ……」

一発の弾丸が放たれ、新出の車の前輪のタイヤを撃ち抜く

「うわっ！……パンクか？」

突然衝撃を受けた新出の車は、バランスを失いタイヤが悲鳴を上げ始める

路面と接触し火花を散らすタイヤ、新出は懸命にハンドルを操作するものの、右側前方にある電柱へ激突して漸く停止した

「ドーン！」

「つ……、ついてないな」

激突の衝撃で頭をぶつけたのか、新出は頭を押さえて深い溜め息を吐いた

偶然にも通り掛かつた人々が車の周囲に集まり始めると、ジンとウォッカは音もなく姿を消した

「ずらかるぞ……ウォッカ」

「へい、兄貴」

四方や狙撃されたとは夢にも思わず、新出自身が自損事故として届け出た事で、警視庁の交通課に所属する由美はただの交通事故として処理した

この同時刻の日暮は自宅謹慎中……その為みどりがターゲットと

なつた

普段通りに買い物に出掛けたみどりは、自宅近くの歩道を歩いて
いると……

「危ない！！」

「え……あ……！」

突然の声に上を見上げた途端にみどりの頭上目掛けて落下して來
る植木鉢が視界に入った

ガシャン！！

一瞬の静寂の後、現場周辺は騒然となつていた……

「ちょっと奥さん？ 大丈夫？」

「大丈夫か！？」

「え……ええ、ああびっくりした？」

「危ないわね～」

「ほんと？」

「一人を襲つた偶然を装つた事故……入院中のコナンは未だ気が付いてはおらず、彼の地の最深部では彼による懸命の説得が続いていた

「……優作、未だ続けるのかい？今ならただの事故で済む、未だ引き返せるがな」

「ああ、続ける」

相手にその胸中を読ませない、その双眸は怒りの焰が燃り続けていた

そんな優作の態度に小さな溜め息を吐いた彼は友人として説得を試みる

「……君らしくないね？ 今回の件で憤る君の気持ちは理解出来る、だが彼は決して喜ぶ事はない、却つて怒り悲しむと私は思つがな」

「……解っている、盜一」

「新一はホームズを心酔し犯罪を許さない、真っ直ぐな子だからな……きっと自分の所為だと責めて、私を許さないだろ?」

「優作……、最愛の我が子をあそこ迄傷付けられて怒り狂うのは、親として至極当然の事だ。だがな、闇に染まり犯罪者と成り果てた君の姿は見たくない、その怒りは権力にしがみつき命を弄ぶ奴等に向ければいい。違うかい……優作」

「新一君同様に、たつた一つの真実を追い求め犯罪を許さない君を、私は良く知っている」

「これ以上の脅迫行為は私怨……ただの犯罪だ」

静まり返り沈黙が支配する室内盜一の説得を受けて自分の闇と向き合つ優作

数分間の沈黙の後、盜一が試みた優作の説得は終わりを告げた

「……そうだな、盜一。私はどうかしてたよ?」

冷静さを取り戻し笑みが戻った優作

冷静さを失い愚行に走った愚かな自分を恥じた優作は、普段通りの悠然とした笑みを浮かべた

「それでこそ君だよ、闇の男爵」

最悪の事態を免れる事が出来てほっと安堵した盜一は、奇妙な命令を取り下げるべく携帯を手に取った

「「はい、ジンです」」

「ジン、脅しはもう良い」

「「解りました」」

電話を切り優作に視線を向けると、ぱつが悪そうに苦笑する優作の姿に盜一もまた笑みを溢した

「一体どうなるかと思つたよ？」

「ははは……、済まん済まん？」

「切れた君程、恐ろしい者はない？」

優雅で気品を漂わせる笑顔を常に保つ盜一を見つめていた優作は、ふと表情を翳らせ視線を落とす

「君には本当に済まない……」

沈痛な面持ちで、突然謝罪する優作の口から紡ぎ出された言葉は静寂を破り室内に響き渡った

「それは言わない約束だろ？？」

「そうだつたな？」

田を閉じて何かを思い出す様に思考の海へと潜る優作は、組んだ手に深く頑垂れて深い溜め息を吐いた

「権力者達による違法臓器移植の実態を暴く為に集まつた仲間達が何時の間にか歪んで仕舞つた……」

「ああ……、何の罪もない若者達の臓器を奪い健康を手に入れる輩は、何時の時代も途絶える事はなく多くの若者達の命が犠牲になつて来た」

不甲斐ない自分を責めるかの様に吐き捨てる優作と盜一

「それも、漸く終わりを告げる。國家犯罪を暴く為に生まれた組織にジンが加わった事に依つて、大きく変貌を遂げて仕舞つた？」

「ジンはどうする？」

「手筈が整つた今となつては消すしかないだろう、組織を凶悪化させた張本人であり無断で数多くの命を奪つて来た男だ」

「更生するとは思えない、処分は已むを得ないだろ?」

「ああ……、明朝の決行と同時にジンを始めとする狂犬達を処分しろ。全データは消去、更生の余地があるメンバーは放置して構わない」

「解つた、通信衛星への侵入を最優先にするが構わないかな?」

「ああ、ナポレオンやスカイが協力し合つて暁と共に突入して来る。タイミングを見計らつて決行してくれ」

「解つた。いよいよだな、スピリタス」

「その名前で呼ばれるのも最後だな、ブルームーン……明朝の通信衛星の侵入準備に取り掛かれ」

「OK - BOSS」

漸く時が満ち闇が蠢き始めた今、甘い酒に酔つて来た権力者達の逃げ場は、最早存在しなかつた

意地悪

水面上で刻々と準備が進む一方、コナンを危険から遠ざけるべく巧妙に仕組まれた見舞い客が続々と病室を訪れる

その最たるが平次だ

親友が入院したとなれば真っ先に駆け付けるであろうと推理して息子を唆した平蔵

居候先である毛利探偵事務所を出る事にしたコナンの意向に従い、僅かばかりの荷物の運び出しと挨拶に訪れた有希子は然り気無くコナンの入院を知らせた

「入院……！」

「ええ、コナンちゃん車で倒れちゃって入院しちゃったのよ

驚いて目を丸くする小五郎

「嘘……コナン君が入院だなんて……私の所為でコナン君が……」

自分を責めて涙を浮かべる蘭

そんな一人娘を小五郎は慌てて宥め始めた

「蘭、おめえの所為じゃねえ？」

「ううん、私の所為よ！！ 私が悪いの…… ロナン君を避けてたからロナン君は入院しちゃったのよ……。」

「ごめんね…… ロナン君、ごめんね」

顔を両手で覆い泣き崩れる蘭に対し、呆れ果てた有希子はきつぱりとした口調で言い放った

「悲劇のヒロインに浸つてる所を悪いんだけど、ロナンちゃんが入院したのは蘭ちゃんに無視されたからだけじゃないわよ」

「え……？」

「有希ちゃん……」

少々棘のある言葉を言い放った有希子を咎める様に振り返った小五郎だったが、当の有希子はものともせず淡々と黙つて退けた

「三年前口ナソンちゃんが口を出すよつとした一番の理由はなんだと思つ?」

突然の有希子の問いに對して、蘭も小五郎も口を揃えて失恋を匂わす言葉を紡いだ

「え……それはその……」

「そりゃあ～あれだろ?」

「口ナソンちゃんが蘭ちゃんに失恋したからだつて黙つの?」

はつあつと言わない蘭と小五郎に代わつて有希子はあつぱつと言つて退ける

「違つての?か、有希ちゃん」

「ええ、違つわ」

めつけたとおもひした有希子……小五郎は怪訝な顔で問い合わせた

「じゃあ、理由は何だってんだ？」

「確かにコナンちゃんは蘭ひやんを好きだったわ、結婚したい……
といつも想ひながらね」

「……」

有希子は過去形で口づいたコナンの想い、蘭は少なからず衝撃
を受けた

「「めんなさい……」

膝の上で拳を握る蘭

有希子は構わず言葉を紡いだ

「謝らないでいいのよ、ただ単に十歳年上のコナンちゃんが対象外
だったって言うだけだもの」

「でも、蘭ちゃんはコナンちゃんを手離したくはなかった、側にいて欲しかった、でも新ちゃんと瓜一つのコナンちゃんを見ている事が辛かつた……だから避けたのよね」

「……はー」

まるで尋問されているかの様な有希子の姿を射た言葉に、俯いてただ頷くしか出来ない蘭は有希子が紡いだ言葉に漸く頭を上げた

「その時、蘭ちゃんは一度でもコナンちゃんの事を考えてくれたのかしら？ 第一次性徴期と言つ難しい時期を迎えたコナンちゃんの事を少しでも想つてくれた？」

「あ……（そう言えば私、コナン君の事を考えた事なかった）」

田を見開いて茫然と有希子の間に答える蘭

「想ってくれなかつたでしょ？」

「はー……、済みません」

有希子は確認するかの様に囁くと小さな溜め息を吐いて微笑んだ

「コナンちゃんはね、とにかく蘭ちゃんへの想いにはペリオドを打つていたのよ。あ～、多少は引き摺つていたけど」

「うょっと待つてくれよ、有希ちゃん。なら何で坊主は……あー……やつらの事が……」

「え？」

「や、コナンちゃんも男の子だから限界だったのよ。だから距離を置いておいていたって訳？」

「何時迄もガキじやねえか？」

有希子と小五郎の会話について行けない蘭は首を傾げて交互に見つめる

「お父さん？」

「……解らねえんだ……？」

訳が解らない自分の娘の幼さに呆れた小五郎は蘭の頭を撫でながら頸垂れる様に咳いた

「コナンちゃんは頭良いから余計にね」

「間近にいたんじゃな~」

二人の視線を一身に受ける蘭は終始訳が解らず首を傾げるのだった

「あの~???」

「まあ、 そう言ひ訳だから」

「わあつた、 当面は有希ちゃん家に住むのか?」

「多分 そ う な る わ ん、 隣 に 哀 ち ゃ ん も い る し、 向 こ い づ に 連 れ て 帰 る
か は コ ナン ち ゃ ん 次 第 ね?」

「ロサンゼルスに連れて帰るのか?」

「ん~、哀ちゃんが一緒にいるわね

「ついで事は、坊主の相手は阿笠博士ん所のガキか」

「やうなよ、コナンちゃんっぽ漸く自覚したのよ?」

「か~、おどろいていい奴だ?」

「コナンちゃんの恋愛は一目惚れじゃなくて、ワインが熟成する様に想いを深めて行く……そんな愛だもの」

「コナンといな?」

（やうぱまつ哀ちゃんなんだ……、ひみつ海しこな~）

完全に蚊帳の外にされた蘭は、一人寂しそうにコナンと過ごした日々を思い出していた

（やうぱま、何時も哀ちゃんと一緒にたつけ）

「悔しいんでしょ、蘭ちゃん」

突然話題を振られた蘭が驚いて顔を上げると、そこには不敵に笑つ有希子がいた……

「ねえ～蘭ちゃん、仮に新ちゃんとコナンちゃんが同一人物だとしたらどうする？？」

「え……」

「新ちゃんが江戸川コナンになつて蘭ちゃんの側に立つて来た
としたら……どうする？？」

「どうして……」

有希子の質問に口惑い答えて詰まつた蘭

「新ちゃんなら恋愛対象だけど、コナンちゃんなら対象外つて事は
蘭ちゃんの想いは子供の恋愛だつたつて言う事よね？ 新ちゃんが
大変な事件に巻き込まれてて、小さな体で精一杯蘭ちゃんを守り通
して、蘭ちゃんの幸せを願つて新しい恋を祝福したとしたらどうす
る？」

笑顔で詰め寄る有希子

返答出来ない蘭

小五郎は蘭を静かに見守った

(蘭……)

(新一とコナン君が同一人物だったら?)

(もし……もしもそうだとしたら私は新一を子供扱いして一番残酷な方法で新一を傷付けてしまったと言つ事になる……)

(私は待たされて等いない……)

(私が新一を裏切った……)

「ほ〜、漸く自覚したんか」

一通り現在の状況をコナンから聞き出した平次は、親友の小さな変化を見逃さなかつた

他人の恋愛事情には鋭い平次は顔を真っ赤に染め上げたコナンを、これ幸いとからかい始めた

「つっせえ？」

「で、もつ告つたんか？」

ベッドの縁に腰掛け、漸く訪れた親友の新しい恋路にコナンの頭を小突いて進捗状況を問い合わせる平次は、やはり嬉しそうだ

楽しそうに笑つてコナンをからかう平次に、林檎の様に真っ赤になりながらコナンも懸命に返り返していく

「ま?未だに決まつてんだろう?」

「やうまいおめえはプロポーズしたのかよ？」

「俺の事はええやう？」

「早くしねえと鳶に油揚げかつ浚われるぜ」

「放つとけや？」

「俺はお前程、モタモタしたりとわ？」

「バーロ、俺は気付いたばっかだつつの？」

「……それもそやな、まあ確り氣張れや」藤

「早く出でりとわつて姉ちやん盗られてしまつで？」

「バーロ、んな事をせつかよ……」

熱が冷めやらぬ火照った顔を、窓からの冷たい空氣で冷ます。口ナ
ンの姿に平次はほつと胸を撫で下ろしていた

（多少は引き摺るやうけど…………もう大丈夫やな、工藤）

賑やかな会話が途切れて暫しの静寂が訪れた頃、扉の外からひそひそ話が漏れて来た

「「ほらね、やっぱり哀ちゃんだったよ」」

「「鈍い奴だぜ」」

「「ほんとですね」」

「「ち～違つわよ？」」

声の主は、コナンの入院を聞き付け駆け付けた、元太光彦歩美と哀そして阿笠博士だった

必死に隠れているつもりなのか？ 扉の隙間からは歩美的制服のスカートが見えておりばればれだ

これに気付かないコナンと平次ではなく、会話が途切れた途端に

見付かつた

「何しとんねん?」

「おめーりーーー。」

当然の如く顔を真っ赤にして怒鳴るコナンを手荒く祝福する三人は、満面の笑みを浮かべて喜んだ

「やつぱり哀ちゃんだつたんだーーー。」

「鈍するわんわん、コナンーーー。」

「わいですよーーー。」

「放つとカツの?」

コナンは元より、哀も真っ赤に頬を染め上げ阿笠博士の隣で小さくなっている

「良かつたのー、哀君」

「私は別に……」

涙ぐんで喜ぶ阿笠博士に対し、顔を真っ赤にして否定する哀だつたが、当のコナンが押し切られる形で肯定して仕舞い哀の逃げ場はなくなつていた

「早よ、言わんかい」

「やうだよ、コナン君」

「男ならバシッと決めろつてんだ」

「灰原さんも待つてますよ」

「う……わあつたよ？後で言つて？」

「「「やつたあ……」」

小さな友人達に囁かれて観念したのか、コナンと哀はぼつりと呟いた

「おめえらの前で言えるかつての……」

「お願いだから一人の時にして……」

「あたりめえだ？」

嘗ては対極に位置していた二人

^\ 犯罪組織の科学者と高校生探偵 ^

^ 加害者と被害者 ^

互いに相容れない出逢う筈がなかつた二人、偶然に偶然が重なり
出逢うべくして出逢つた二人は、共に手を携えて運命に立ち向かい

……未来を勝ち取ろうとしていた

・「ン」・

（今日は随分と多いな……）

賑やかな病室の扉をノックする音が響き、新たな来客に首を傾げながらコナンは入室を許可した

「どうぞ」

「突然来て申し訳ない、コナン君」

引き戸を開けて入つて来たのは、白馬警視総監と小田切刑事部長・松本管理官そして日暮警部だった

錚々たる顔触れに驚いたコナンと平次は、目を大きく見開いた

「「は……白馬警視総監！！」」

驚いて声を張り上げたコナンと慌てて直立不動で敬礼した平次が発した大物の名前に全員が驚きを隠せなかつた

「「ええ！」「」

(日本警察のトップが直々に謝罪に来るなんて……)

日本警察の大物と言つ訪問客を受けて阿笠博士は慌てて元太達に病室を出る様に促した

「みんな?廊下に出よつかの?」

「それがいいわね……」

無言で領き戻つと病室を出よかつると、小田切・松本・田畠は阿笠博士と袁達に対して心底済まなそつに謝罪して来た

「済みません……、阿笠さん」

「済みません」

「いえ、構いません」

そつと戻り戸が閉じられると、平次が驚きを隠せない儘声を掛けた

「白馬警視総監・小田切刑事部長・松本管理官・田暮警部」

つい先程迄賑やかだった室内は、一転して水が打った様に静まり返り張り詰めた緊張感が支配した

「平次君じゃないか」

同期である平蔵の息子に田を止めた白馬警視総監は、極自然体で声を掛けた

「（汗）無沙汰します、白馬警視総監？」

「ああ、そんなに暇まらないでいい。 今田は非番かね？」

「は？ 今田は休暇ですねん？」

「坊主が倒れたて聞いて、慌てて親父に許可も取ったんですねわ」

「やつが、お父さんは息災かね？」

「親父は殺しても死なしまへん」

「相変わらずの様で安心したよ」

「はい、親父も気にしとりましたわ」

「そうか」

一通り平次と挨拶を交わすと、一同は神妙な顔付きでコナンに向
き直った

「コナン君」

真っ直ぐにコナンを見据えると……深々と頭を下げる

「1Jの度は本当に申し訳なかつた」

「……白馬警視総監」

「捜査に国民党を、しかも未成年である藤新一君や君に協力を要請
する事を黙認して来た私の失態だ」

「本当に申し訳なかつた」

「深々と頭を下げる、日本警察の大物達にコナンは静かな声で頭を上げる様に促した

「白馬警視総監小田切刑事部長、皆様……どつか頭を上げて下せ」

「コナンに促され頭を上げると、そこには穏やかな笑みを浮かべるコナンがいた

「田暮警部だけの所為ではありません、偶々私が疲れていただけの事……私の未熟さ故に耐えられなかつただけの事です」

「いや、君は未だ未成年でそれが普通なんだ。例え君が成人した名探偵だつたとしても、体調が悪いコナン君を呼び出した儂に配慮が足りなかつたんだ。その上あまりに似ている君達を混同して仕舞い、辛い思いをさせて仕舞つた事を申し訳なく思つている」

「申し訳なかつた、コナン君」

「だが、決して君の実力を認めていない訳ではないんだ」

「解つてこまよ、田畠警部……」

三十分後

白馬警視総監一行は、扉の外に待機していた高木美和子涉西警部と共に本庁へ戻つて行つた

「あつさり許して良かつたんか?」

田暮達に未だ怒つてゐるのか、納得出来ない様子の平次は腕を組んでコナンへ問い合わせた

「ああ、もう怒つてねえよ」

「それにしちゃ浮かない顔じとるやんけ」

この九年間、影からコナンを支え幾度となく抗議して來た平次にとつて、今回の有無を言わさない謝罪内容に到底納得いく訳もなかつた

それもその筈、大阪府警の警部である平次は、警察官と言つ立場から事ある度に抗議し続けて來た……と同時に、成長するに連れて

傷付き悲し気な笑みを浮かべる様になつた親友を案じて相談に乗り
支えて来たのだから無理はない

「……蟠りが消えた訳じゃねえが、何時迄も怒つてちやガキみてえ
だしな」

「まあ～それが大人の対応やな、白馬警視総監直々に出向かれたん
や、ごねて追い返す訳にもいかへんし、どのみち日本警察の大損失
には代わりあらへん」

「当分の間は、協力する気ないんやろ?」

「……ああ

窓の外を見つめた儘コナンは、沈痛な面持ちで目を伏せると深い
溜め息を吐いた

「今は、組織だけで手一杯だ」

「……ほつか

数分間、重苦しい沈黙が流れた病室にコナンの声が響き渡つた

「な、服部、俺って何者なんだ？」

「工藤……」

「俺は工藤新一なのか？」

「それとも江戸川コナンなのか？」

「確かに俺は工藤新一として生を受けた、だが九年前に幼児化して江戸川コナンとなつてからは……工藤新一時代より遙かに楽しかつたんだ」

「毎日下らねえ会話をして、キャンプや海に行つて、探検して暗号解いて、サッカーしたり野球したりゲームしたり、テスト勉強に付き合わされた事も一度や二度じゃねえ」

「殺人事件に巻き込まれる度に危険な目に遭つてるつてのによ、あいつ等は全然懲りなくて決まって自分達から首を突っ込むんだ」

「……工藤新一の時にはこんな事なかつた、俺は流行りのゲームやテレビは興味がなくて、何時も父さんの書斎でホームズとか世界中

の推理小説を読んでた。自然とホームズの話題や血まなぐさい事件の話ばかりする俺の周囲には誰もいなくなつて、学校のダチとはサッカーの話題位しか話が合わず、大抵は推理小説を読むか寝てるかのどつちかだつた

「そんな俺の隣には、何時も蘭がいた」

「ホームズの話を文句を言いながらも聞いてくれたのは蘭だけで、何時の間にか惚れてた」

「俺には蘭しかいなかつたんだよ」

「ははは……笑えるだろ?」

「日本警察の救世主と言われた、工藤新一には腹を割つて話せるダチはいねえんだ……」

(工藤……)

自分の掌を見ながら、切なきな表情でぽつりと本音を溢す親友に
対して、平次は声を掛けられなかつた

工藤新一と言つ決して逃れられない影に今の「コナンは己を保つのに精一杯だった

（……そないに大事なダチなんか、俺本氣で妬いとるわ？）

十歳年下の元太達にちょっとびり嫉妬した平次は一際深い溜め息を吐いて最良と言える道を示す

「ほなら江戸川コナンの儘でええやないんか？」

「……良いと思つか？ 服部」

「江戸川コナンは本来なら存在しない人間だぜ？」

すがる様な眼差しで見上げるコナンの真横に腰を下ろした平次は、頭を撫でながら力強く告げた

「俺はええと思つで？」

「道は二つある」

「工藤新一に戻り九年のブランクを埋めて、正体を明かす明かさないに拘わらず、あいつ等と少なからず距離を置くか」

「江戸川コナンとして工藤新一の影を背負いながら、あいつ等と生きて行くか……この場合は正体を明かしても明かさなくとも大して変わらへんやろな」

「どっちを選択するにしてもや、工藤新一は江戸川コナンの影を、江戸川コナンは工藤新一の影を背負う事になる……後はお前次第や、工藤」

「まあ、俺と会ったんもちつこいつなつてからやし、お前の知能指数と推理力洞察力等、全てが高うて意氣投合し、何れ養子なる事を知つとつたつて筋書きなら、俺がお前の事を工藤工藤つて呼んでたんも説明が付くやろ」

「確かに江戸川コナンは本来ならば存在せえへん、せやけどな工藤、この九年間江戸川コナンは確かに存在したんや、俺は江戸川コナンと言つ人間は別人やと思うとる」

「どちらを選択しても、お前がお前である事には変わりはないんや……お前が”迷宮なしの名探偵””日本警察の救世主”である事は、今も昔も変わりはない」

「せやね~。」

「”平成のSherlock Holmes”」

親友服部平次の言葉の一つ一つに込められた想い

「ナンは頭が熱くなりながらも懸命に堪えて小さく呟いた

「Thank You……服部」

堪えきれず一筋の滴が溢れ落ち腕で覆つて啜り泣くコナンの肩を、
平次はただ無言で抱いていた

（九年もよう耐えたな、一藤）

（犯罪組織に命を狙われると言つ死と隣り合わせの日々の中で、お前は自分に関わる人達の命を守り通した）

（普通なら当に発狂しどる所や）

（十七歳と言つ多感な時期に全てを失い、苛酷な真実を知つて尚も

お前の魂の輝きは失われていない）

（”平成のSherlock Holmes”は伊達やないわ？）

（せやナビ）こつ、一体幾つの迷宮に迷うとこのや？..）

何人たりとも立ち入れぬ空間

平次はターニングポイントを迎えて立ち止まっていた親友が再び歩みを始める瞬間を見届けたのだった

「ありがとな……」

「かめへんつて、幾らでも相談に乗つたるさかい気にせんでええ」

静寂に包まれていた病室は、泣き止んで照れ臭そうにお礼を言つた「ナン」と、満面の笑みを浮かべる平次の笑い声に包まっていた

「ナン」と平次が再び他愛もない会話を再開して暫く経つた頃、新たに見舞い客が訪れ様としていた……

予想外の見舞い客（前書き）

お気に入り登録&評価&アクセス本当に有り難う御座いますm(_) m?

予想外の見舞い客

「H.I. - COOL 800 Y」

「ジョディ先生・キャメルさん・赤井さん」

「よ～、FBIの姉ちゃんやないか」

新たな見舞い客はFBI捜査官のお馴染みの面々で、幾分慌てた様子で病室に入つて来た

「良かつた、無事で？」

「「は？無事？」」

訳が解らず見事にハモつた平次とコナンは首を傾げて顔を見合わせた

「突然」めんよ、「ナン君」

「坊や、元気そうだな（涙の痕跡……知つて仕舞つた様だな）」

「うそ……どうしたの？」

病室に入るなり脱力した面々にコナンは首を傾げて問い合わせた

「どうもひまなこわよ？」

「ジヨーディ先生？？？」

「なんやなんや？何が遭つたんや？」

腰に手を当てて身振り手振りで吐き捨てるジヨーディに困惑するコナンが益々解らずに首を傾げると、赤井が苦笑しながら事の経緯を説明し始めた

「先程坊やが入院したと聞いてな、もしや奴等が何か仕掛けで来たのかと思って慌てて来たんだ」

「時期が時期だけに、奴等は何をするか解らないからね？」

「つたく、心配したのよ？」

どうやらコナンが入院した事で組織が何か仕掛けて怪我を負つた
と思い駆け付けてくれたらしい

「成る程な～、確かにタイミングが悪すぎや」

「「」めんね、心配掛け？」

多忙なFBI捜査官達に心配掛け仕舞つたコナンは慌てて謝罪
すると共に笑顔を向けた

「忙しきのに来てくれて有り難う

「良じのよ」

「コナン君には世話をになつてるからね」

「まあ～無事で良かつた

ほつと安心して笑みを浮かべるジョーティ達はコナンの赤くなつた
目元を見逃さなかつた

(目が赤いわね……泣いていたのかしら?)

(何か遭ったのは間違いない様だが……)

少し訝しみながら、心配そうな眼差しを向けるジョディとキャメルを他所に、赤井は射る様な、探る様な眼差しをコナンへと向けた

「どうやら迷いを吹っ切れた様だな、坊や」

「うん……、何時からかな……。自分が解らなくなつてたんだけどね……」

暫し思案する様に目を伏せたコナンは、ゆづくつと赤井を見据えると、意を決して問い合わせる

「赤井さんは知つてたんだよね?」

憐げに微笑んで眼差しを向けるコナン

何も知らないジョディとキャメルは、赤井とコナンを交互に見据

えながら怪訝な声を上げた

「え……何の事なの？ 秀？」

「コナン君？」

二人の問い掛けに対し、何方も答えない儘、赤井は短く返答した

「ああ……、確証を得られたのは最近なんだがな……」

「……そう」

辛そうに目を伏せて再び沈黙したコナンの傍らには、平次が心配
そうな眼差しで寄り添っていた

「工藤……」

「……大丈夫だ、服部。 覚悟は出来てつからよ……」

「無理しなや、俺がおるさかい」

「Thank You……」

心配で堪らない

そう言った眼差しで寄り添う平次に、ジョディとキャメルは、“何事が遭った”……と確信し気を引き締めた上で、深く傷付いているコナンと赤井へ再度問い合わせた

「一体何が遭ったの？ コナン君」

「赤井さん？」

数秒間沈黙するコナンと赤井は確認するの様に視線を合わせると、一人は小さく頷き合うつい意味深な言葉を紡ぐ

「今はまだ言えないな……」

「『めんね……、ジョディ先生キヤメルさん』

憐れに微笑むコナンの姿に何も言えなくなつた一人は、小さく溜め息を吐いて諦めた様に承諾の言葉を発した

「仕方ないわね？」

「まあ、明日には解るだらうから、もう少し待つてくれないか」

「解ったわ、秀」

「解りました」

「ううと決めたら、梃子でも動かないし口も割らない二人を、良くな
知つているジョディとキャメルは早々に諦めた

先程、赤井が口を滑らせた”明日”と言つ言葉を訝しんだコナ
ンは、まさかとは思いながら口を開けいつとした所で平次が遮つた

「あ、明日って何があるんか？」

「服部君は何も知らされてないのね」

「何の事や？」

ジヨーディの言葉に怪訝な顔を向ける平次と、察しが付いたコナンは鋭い眼差しを向けた

「まさか……、ジヨーディ先生」

「ええ明日、本拠地に突入する事になつてゐるよ」

「明日……」

まさか明日とは夢にも思わず、コナンはシーツを握り締めて詰め寄つた

「どうりでＳＡＴが騒がしい筈や？」

「気付けよ、てめえ……」

「しゃあないやひ、どうせ親父の箱口令なんやからの～」

お手上げの仕草でコナンの抗議をぱつさりと切り捨てる平次だが、見舞い客の多さの訳に気が付いたコナンは、拳を握り締めて抗議の声を上げたのだった

「あ……んの、くそ親父……」

「やつひつかよ……」

優作に対して、怒りを露にするコナン

「コナン君？」

「何か遭つたのね？」

「やたら来ると思えば、俺は病み上がりだぞ……」

「へへへ？」

怒りを爆発させたコナンの凄まじさで、ジョディとキャメルは苦笑し、赤井は懸命に笑いを堪えていた

「やつひつかよ……、今日はやたら見舞い客が多かつたんやけど、優作はんか布希子はんの仕業やな？」

「大方、病み上がりのお前を疲れさせて、明日は起き上がりない様にするつもりやろな~」

呆れ果て起こる気にもなれず、平次は横目で怒り狂うコナンを見下ろした

「絶対に行つてやる……」

「熱下がつた言つても、未だ微熱あるんやで？ 緊らなんでも無理や、何なら俺がお前の代わりに行つてもええで？」

仕組まれた見舞いと知つて大人しくする親友でない事を良く解つている平次は、一応説得するもののコナンの決意は固かつた

「これは俺の事件だ！！ 俺が解く！！ おめえは手を出すな！！」

「協力してくれる事には感謝してる。だが、当事者でないおめえを危険に晒す訳にはいかねえ。それに……これは俺がけりを着けねえといけねえんだよ」

「工藤……、けど俺はお前が心配なんや」

何時も影から協力する平次の想いはコナンも良く解っていた……
だからと言って唯一無二の親友を危険に晒す事等、到底出来る筈も
なかつた

「Thank You……服部、けどおめえだけは失いたくねえん
だ」

風の前の蠅子 (前書き)

お気に入り登録&何時も読んで頂いて有り難う御座います m ()

コナンが少々甘えん坊になつて仕舞いました?

嵐の前の静けさ

シンと静まり返った病室

滅多に明かさないコナンの想いに誰もが胸を締め付けられた

「……工藤」

「コナン君……」

(親友……か)

暫しの沈黙の後、親友の想いに破願させた平次は一言だけ呟く

「おおきに……、工藤。 けどな俺もお前を失いたくないんやで?」

二人の絆の深さを目の当たりにしたFBIと有希子は、予想外の見舞い客に臍を噛みながら、コナンと平次の深い絆に小さな溜め息を溢した

(ほんと、良いお友達に巡り会えたわね新……ううん、慧ちゃん)

タイミングを見計らい有希子が扉に手を掛けた三十分程前……米花町の毛利探偵事務所では、コナンの荷物を受け取った有希子が、ビル前の路上で小五郎と向き合っていた

「コナンちゃんがお世話になりました」

「良いって、有希ちゃん?」

有希子の言葉に囚われた蘭を見かねた小五郎は、一言言つたそうに溜め息を吐いた

「あら、事実でしょ?」

何時もの明るい笑顔で、ウインクを飛ばす有希子に対し、無駄だとは思いながらも小五郎は苦言を呈した

「だからと云つて、あれはねえだら。まあ~事実ではあるがな?」

「母親として、息子を傷付けた、蘭ちゃんの行動は許せない……、それに、嘘は一言も言つてないわよ」

厳しくとも事実を言い放つ有希子に小五郎は否定せず同意の意を示した

「わあつてゐよ、有希ちゃん」

「恋愛は待つだけじゃ駄目だ……惚れた相手を手に入れたいならば自ら行動を起こさなきやなんねえ、本氣で惚れたなら尚の事だ？」

「わつよ、英理ちゃんの為も、小五郎君も素直になつなさいね」

「有希ちゃん？」

予想外の言葉に、顔を真っ赤に染め上げた小五郎は遠ざかる車を見つめて、ぽつりと呟いた

「つたぐ、わかつてらあ？」

小五郎が踵を返してビル内へと入つて行つた頃、車内の有希子は何時もの明るい笑みを浮かべて、悪びれもなく言い放つた

「これ位の意地悪は許されるわよね〜」

細やかな意地悪かどうかは疑問が残る所だが、車は工藤邸へ立ち寄った後米花総合病院へと向かい、コナン達の会話を聞いて仕舞うのである

「……わあつたよ、服部？」

数秒間の睨み合いの末、平次の熱意にコナンが折れる形になり、本拠地突入に参加する事になつた

「けど仕事は大丈夫なのか？」

「ああ、三日程休暇くれたんや」

「ほ~粋な親父さんだな」

「そうね、心配で堪らないでしょ」

「そうですね」

FBIとしても危険な目には晒したくはなかつたが、二人の決意

の固執に説得を諦めて本題へと入つて行つた

「じゃあ、二人とも覚悟は出来るのね？」

「「ああ」

「突入は明朝の夜明けと同時だ」

「場所は杯戸港だから、直ぐ解ると思うよ」

「「解つた」」

大きく頷き気持ちを引き締めたコナンと平次は、作戦等を打ち合
わせて若干の修正を加えた後に、未だに詳細が解らない研究分野へ
と切り込んだ

「そう言や、AHTX4869じゅう藥の目的とか解つてへんのか
？」

「バーロ、AHTX4869じゃねえつうの。 APTX4869
だ、APTX4869」

「細かい所、気にするやつは？」

「てめえが間違えるからだろ？ がよ？」

息の合つた二人の会話

『気配を殺して聞いていた有希子はタイミングを見計らつて扉を開けると、口を開き掛けた赤井を止めた

「ああ、大体は判つている」

「一体、どんな目的があるんや？」

「それは『やうやく』にして下わるへ 赤井さん」

「工藤さん、解りました？」

扉を開けて入つて来た有希子に全員の視線が集まり、有無を言わせずそれ以上の発言を阻止する

「幽やん…！」

「眞実は自分自身の目で確かめなやい、慧一」

「幽やん？」

少し悲し気な眼差しを向ける有希子の姿に、コナンはそれ以上の質問は出来なかつた

「……解つたよ」

「つたく、心配ばかりさせて？」

「行くのね？」

「ああ、けりを着けてえんだ」

「解つたわ、外出許可を取つてあげるから今日はもう休みなさい」

「」(つ)と決めたら決して譲らない息子だと言つ事を良く知つている有希子は諦めて就寝を促した

「そやな、俺も本庁行かなならへんし？」

「じゃあ、我々は」これで失礼します」

「お忙しい所を有り難う御座いました」

「いえ、奴等が何か仕掛けて来たと思ったんですが無事で良かったわ

「では失礼します」

「わざわざ有り難う、明日ね

「ええ」

「ほな、早朝迎えに来るさかいな」

「え？」

平次達が丁寧にお辞儀をして病室を後にすると、「ナンは複雑な眼差しを有希子へと向ける

「母さん……」

「明日……、全てが終わるわ」

「今は休みなさい」

「……信じて良いんだよな?」

「ナンの口から思わず溢れた言葉……すがる様な眼差しにて、有希子は慈愛に満ちた笑みを向けた

「当たり前のじゃない」

熱を持った額にコシンと自分の額をへつ付けて熱を計った有希子は母親以外の何者でもなかつた

「未だ少し熱があるわね。今晚は良く寝て、明日に備えて備えて

さう言つて濡らしたタオルを額に乗せて丸椅子に座ると、ひみつ
ぴり不安になつてゐるコナンを眠りに誘う

最後になるかもしれない優しい母の掌の温もつて安心したコナン
は深い眠りに就いた

コナンが眠つて暫く経つた頃、着替えと阿笠博士の夕食の為に
皿皿に寝ついていた哀がそつと床つて来た

「あら寝ちゃん、めんなさいね」

「こ、これ……」

「慧ちゃん、もつと眠つたのよ」

「色々ありましたから……」

コナンの枕元へ佇み寝顔を見下ろす哀に、有希子は渡しあびれて
いた物を手渡した

「哀ちゃん、これを渡して置くわね」

「……これは戸籍謄本?」

「阿笠玲美、……」

「お母様と明美さんの名前から一章ずつ頂いたの、お母様達の分迄
生きて幸せになつてね」

「有り難う御座います……本当に」

戸籍謄本とパスポートを受け取つた哀の双眸から涙が溢れ落ちた

隠された真実（前書き）

真実へのCountdownと共に、お気に入り登録有り難う御座います（――）

蘭ちゃんの長い詞です

有希子が帰つた後……

茫然と血室に閉じ籠つた蘭は、有希子が言い放つた言葉に囚われていた

脳裏に有希子のあの言葉が蘇り、例え話がまるで、打ち明け話をされたかの様に響き渡る

・仮に新ちゃんと「ナンちゃんが同一人物だとしたらどうする?・

・新ちゃんが江戸川コナンになつて蘭ちゃんの側にいてやつて來たとしたら……どうする?・

・新ちゃんなら恋愛対象だけど、コナンがやなら対象外つて事は蘭ちゃんの想いは子供の恋愛だつたつて言つ事よね?・新ちゃんが大変な事件に巻き込まれてて、小さな体で精一杯蘭ちゃんを守り通して、蘭ちゃんの幸せを願つて新しい恋を祝福したとしたらどうする?・

有希子は例え話をしたのであって、打ち明け話をした訳ではない

それは蘭も良く解っていた

だが、蘭には有希子の例え話が事実に思えてならなかつた

それもその筈、有希子の例え話があまりにも現実と符合する為である

（もし……もし本当だつたら？　コナン君が新一だとしたら？）

（命を狙われてて正体を隠す為に小さくなつていたとしたら？）

（大人びた言動も、あの推理力・洞察力・観察眼も、服部君が会つ度にコナン君を工藤と呼ぶのも……）

全ての辻褄が合つ

この時の蘭の脳裏には、コナンとの思い出の数々が走馬灯の様に駆け巡つていた

事件に遭遇する度に事件現場を彷徨いて、誰もが気が付かない事

に気が付き的確なアドバイスをして来たコナン

元々コナンの正体を何度も疑つて来た蘭は直ぐに訝しみ始めた

（やつぱり……コナン君は新一？）

（コナン君は何時も私を守ってくれた……、高木警部が撃たれて記憶をなくした時もホームに突き落とされた私を助けてくれたよね）

（難しい事とかいろんな事知つてて、自分が危険なのに何時も自分の事は後回しで命懸けで助けてくれて、私が泣いていたら慰めてくれたよね）

（そんなコナン君が新一みたいで格好良くて……なのに……なのにどうしてコナン君を好きにならなかつたんだろ？）

（「あんね……コナン君）

ぱりぱりと溢れ出る涙を拭う事もせず、ただ泣き続け自分を責める蘭

そんな一人娘を小五郎は黙つて見守り続けた

(……本当はコナンに期待したが流石に年の差が有りすぎるか？）

（ま、こればかりはしゃあねえ？）

男手一つで育て上げた蘭を手離したくない小五郎、蘭がコナンを選ぶ事を期待していたのだが……それは泡沫の夢だった

そんな父親の叶わぬ願いを他所に、蘭は有希子の言葉を振り返る

（でも……本当にコナン君が新一だったらどうしよう、ずっと側にいてくれてたのに、私が待たずに裏切った事になるんだよね？）

（確かに瓜一つだけ……）

（あ、でも……確かあの時だけは新一とコナン君が同時に存在したんだっけ、それ以外はどちらかがいなかつた）

（コナン君と新一が同時に存在した文化祭のトリックさえが判れば、コナン君と新一は同一人物の可能性が高くなるわね）

（思い出すのよ、あの日のコナン君の一挙手一投足を思い出すなきや……）

九年前の記憶を必死に掘り起こす蘭、楽しかった事も辛かつた事、様々な記憶が今も尚鮮明に脳裏に浮かぶ

（あの日は退院した日で、コナン君は風邪を引いてずっとマスクをして外さなかつたのよね……）

（せうそ、文化祭から帰つて来て直ぐに寝ちゃつて、飯食べなかつたんだっけ、朝御飯も寝坊して食べなかつた……）

一つずつ手懸かりを思い出して疑念を深めて行く蘭は最大の疑問に突き当たつた

（あれ？ ちょっと待つてあの時のコナン君、一度もマスクを取つてない？）

小さな欠片が嵌まり、欠けていた欠片が次々と埋まり始める

（嘘……私、あの時のコナン君の顔を見ていない）

（今思えば、あの時のコナン君は普段のコナン君と様子が違つてた、絶対にマスクを外さなかつたんだっけ）

（まさか……本当に……「新一？」

頭を抱えて、懸命に思い出す蘭

「もつと手懸かりを思い出さなきや……、何がある筈よ……何か、新一が関わった事件にヒントがある筈よ」

沢山の事件に巻き込まれて来た蘭とコナン、数多くの事件の中でも新一絡みの事件は極僅かしかない

（一番印象に残つてるのは、文化祭の事件……そうだ、大阪に行つた時にコナン君が私を庇つてさされた事件があつたんだ。その時にコナン君、服部君のお守りの中の鎖で助かつたんだっけ……あれ?）

（あの鎖に付いた指紋を取つた事あつたよね……、東奥穂村から手紙が来て服部君と一緒に行つて、新一の名誉を失墜させて社会的に抹殺する為にそつくりに整形して罪を犯した人がいたじゃない。あの時、犯人が新一じゃないって証明する為にあの鎖の指紋を使つたのよ）

(あの鎖に付いているのはコナン君の指紋の筈……見付けた)

(動かぬ証拠を見付けたわ)

(後は物証、指紋を照合すれば……でもどうやればいいの?)

この時の蘭の脳裏には、あの時新一が述べたあの言葉が蘇っていた

お守りの鎖に付いた、コナンの指紋を使って平次が新一の無実を証明した時に、バルコニーから入つて来た新一が述べた言葉

「それは人間が生まれながらにして天より授かつた終生不变の・エンブレム・。万人不同である為犯罪捜査に於いて最も信頼度の高い証拠と成り得る痕跡・指紋なんだろ・

この言葉を思い出した蘭は、直ぐ様一階の事務所に飛び込むなり、元刑事である父親を問い合わせた

「お父さん……」

「どわ？ な？ 何だ？」

驚いて椅子から転けそうになる小五郎に構わず、蘭は襟元を締め上げると有無を言わせらず迫った

「指紋照合の仕方を教えて……」

「は……はい？ () ……怖え～？ ()

蘭の気迫に圧倒された小五郎は深い溜め息を吐くと、指紋照合に必要な物を蘭に持つて来させたのだった……

「何なんだ、つたく？」

「パソコンとスキヤナーネ式、照合したい指紋が付着している物と指紋を付着させるプラスチックの様な透明な板、後はパフの様な物を持って来い？」

「解った？」

「え～と、ベビーパウダーと下敷きと～

直ぐに用意を整えている愛娘の後ろ姿を見ながら、小五郎は一際

大きな溜め息を吐いたのだった

(はあ〜、ちつさのあれだな?)

「やれやれ?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0581x/>

虚像の追跡者-Pursuer-

2011年10月10日05時48分発行